

リカアドオにおける地代理論の発展

井 上 次 郎

—

デヴィッド・リカアドオ (David Ricardo) の経済学は、『人口原理』と『地代理論』とを支柱とする経済学である。^(一)

人はよくアダム・スミス (Adam Smith) とリカアドオを対比する。いうまでもなく、アダム・スミスは正統学派経済学の創始者であり、近世経済学の開祖と讃えられている大学者であつて、リカアドオはまた同学派の中興の祖乃至は完成者と目されている碩学である。従つて、この両者は同じ学派の伝統に棹さす学者ではあるけれど、この二人の経済学を丹念に比較すると、研究の形式や内容の甚だ異なるものの看出されることが、吾々の注意を深く惹きつける。

スミスの経済学は、その著書の標題が示すように、国富の『本質』と『原因』とを究明する経済学であつたといわれる。これに対して、リカアドオは、問題の焦点を、富の生成の問題から分配の問題へと移し、従つて、彼の経済学においては、分配問題の考察がその主要課題となつていと観られている。なお又、多面的、総合的な

ことがスミスの理論的考察及びその敘述の特徴であるとするならば、リカアドオのそれは局限的、純理的なことがその特徴であるということができる。リカアドオの経済学においては、スミスのような想華の多彩絢爛をもとめることができないとしても、その学説体系は沈思に沈思を重ねて構築されたものであるだけ、推理の透徹と理論の統一の点で遙にスミスのそれを凌駕すると看られるのは、これがためである。

曩に述べたように、リカアドオの経済学は、分配の経済学であり、分配を規定する法則を定立する経済学である。ところで、この法則定立の基底となり、従つてまた、前後の脈絡において全体を貫通し、整然たる学説体系の構築を成就せしめている基礎的理論と目されるものは、すなわち人口原理と地代理論である。つまり、この二つの理論は、彼のうつ然たる学説体系の骨髄となつて、たぐい稀な均斉と統一とにおいて全体を統べくくる役割を果している。ゆえに、リカアドオの経済学を正しく理解するためには、須くこの関連から彼の所説を検討することを要する。

リカアドオが地代理論を自らのものとしたのは、当時の最も大きな時事問題、経済問題であつた穀物法論争もしくは地代論争なるものに、彼が興味をもち、これに参加するようになってからのことであると考えられる。

イギリスにおいては、一八一三年頃から一五年頃にかけて、小麦の価格が大幅に低落することとなり、これがためその対策として穀物法の改正案が国会に提案され、この法案を繞つて地主や農業者や商工業者の利害が対立し、多くの人達が穀物法改正の是非について意見を吐露し、互に議論を闘わした。これが世にいう穀物法論争乃至は地代論争である。

この穀物法の問題をめぐる階級間の対立抗争が日に日に激化し、穀物法に反対の實際運動が各地に展開され、

かようにして穀物法改正の問題は当時のイギリスの最も重大な社会問題、経済問題となつたのである。明敏な頭脳と犀利な洞察力をもつリカアドオが、理論家としてはたまたま實際家として、この情勢をつぶさに観察し、これが対策に腐心するに至つたことは蓋し当然のことといふべきである。彼は、この問題に想いを潜め、進んで論争に参加、穀物法の改正に反対する理論家の最も有力な代表者となつたのである。そのみではない。論争を重ねてゆくうちに、彼は次第にその議論を裏づける理論を更に一段と掘りさげる必要を痛感するようになった。すなわち、穀物輸入の制限の是非をば、その場だけの問題としてではなく、経済学上の基礎原理によつて包括的、根元的、究極的に解明する必要を痛感するようになった。その努力の凝りに凝つたものが、後の『経済学及び租税の諸原理』Principles of Political Economy and Taxation, 1817. の主著となり、彼はこれによつて諸々の経済現象をすべて基礎原理によつて包括統一し、かようにして一切の問題を根元的、究極的に解明するところの理論経済学のうつ然たる一大學的体系を確立することとなつたのである。

だから、その意味において、穀物法論争が彼の生涯の一つのエポックを劃したものであると共に、この穀物貿易の問題が彼の経済学の出発点となつたものであつて、従つてまた、その穀物貿易論の根柢となつてゐる地代理論こそは彼の学説体系を支える支柱となつてゐるものと観なければならぬ。

ゆえに、リカアドオの経済学を解明する秘鑰の一つはこの地代理論に窺めらるべきであると共に、この地代理論の發展そのものが同時にリカアドオの経済学の發展を意味することになる。小論が、特にリカアドオの地代理論を取上げ、その發展を跡づけようとするのは、これがためである。

(一) 拙稿、リカアドオ経済学の二大支柱、立命館大学人文科学研究所紀要、第一号。

穀物法論争に関する、従つてまた、地代理論を取扱つたリカアドオの最初の論者は、一八一五年に刊行された『低廉な穀物の資本の利潤に及ぼす影響に関する一論』An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock; shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus' Two Last Publications: "An Inquiry into the Nature and Progress of Rent;" and "The Grounds of an Opinion on the Policy of restricting the Importation of Foreign Corn."である。該書は、穀物貿易の自由を高調した歴史的な文献であつて、またその傍題の示すように、穀物法の改正を至当の措置なりとしてこれに賛意を表する穀物関税の弁護論者の代表者ともいふべきトマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus)の近著『地代の性質及び増進に関する研究』と『外国穀物輸入制限政策に関する意見の諸根拠』に対する批判として認められたものである。

マルサスとリカアドオは、互に仮借することのない論敵であつたと共に、終生渝ることのない交情を持続けた無二の知友でもあつた。彼等は経済上の他の問題についても所見を異にするところが甚だ多かつたが、別して穀物輸入の問題に関しては火華を散らす論戦をくり展げ、それぞれ、著書において、書簡において、はた又両者の会談において、堂々の陣を敷き、自説の正しさを主張し、相手の議論の矛盾を指摘し、はげしい応酬を続けた。この論争は、両者の理論の發展に、貴重な寄与をなしたものである。なかんづく、リカアドオの生涯にとっては、この論争こそは決定的な重大意義をもつものであつた。というのは、前にも述べたように、この穀物の輸入制限

乃至は地代の騰落の是非に關する現実の問題の討議が、その議論を裏づける理論の一段の精緻を要請し、これが、結局、実業家として多忙な生活をおくりつつあったリカアドオをして経済学の研究に専念させる機縁となつたからである。だから、マルサスはリカアドオにとつて、手ごわい論敵であつたと共に切磋琢磨の益友でもあつたわけである。

それは兎もあれ、先ず、『一論』におけるリカアドオの地代理論について、検討することとしよう。

リカアドオは、その書の本文の劈頭において、マルサスは地代を極めて正しく定義しているとなし、彼の『地代の性質及び増進に關する研究』に掲げられている地代の定義——「土地の地代とは、全生産物の価値のうち、其の当時における農業資本の通常、普通の利潤率によつて見積られた投下資本の利潤を含めた、その種類の如何を問わず、その耕作に属する一切の出費を支払つた後、土地の所有者に残されるところの部分である。」^(三)——を引用し、そこから論旨を展開する。

それに引続き、リカアドオは、次のようにいう。

「されば、農業資本の通常、普通の利潤率と土地の耕作に属する一切の出費とが合計して全生産物の価値に等しい場合には、地代はあり得ない。

また、全生産物がただ単に価値が耕作に必要な出費に等しい場合には、地代もはたまた利潤もあり得ない。

豊饒な土地に富み、誰人も好むままにそれを入力し得る国の最初の植民においては、全生産物は、耕作に属する出費を差引いた後は、資本の利潤となり、地代として何等控除されることなく、かかる資本の所有者に帰することとなるであらう。^(三)」

それでは、地代は如何にして發生するか。

「最初の植民者の最寄りの豊饒な土地が悉く耕作された後、資本と人口が増加するならば、より多くの食物が要求されることとなつて、それは位置がそれ程有利でない土地からでなければ獲得され得ないこととなるであろう。されば、その土地が等しい豊度のものであると仮定しても、生産物をその栽培される場所から消費せらるべき場所へ運ぶために、一層多くの労働者や馬匹等を使用する必要が、たとえ労働の賃銀に何等の変化も起らぬとしても、同量の生産物を獲得するのにより多くの資本を永続的に投下することを必要ならしめるであろう。」^(四)

品質の劣る土地に、耕地を拡張する場合も、全く同様である。

かようにして、富と人口の増加によつて、より多くの食物が必要となつて耕地が拡張される場合には、それが距離のためであれ、土地の劣性のためであれ、同量の収穫を挙げるのに以前より多量の資本を使用することが必要となつて、利潤率の低下をきたす結果となる。茲において、既耕地の利潤に分割を生じ、その差額が利潤から控除され、地代として既耕地の所有者に支払われることになる。従つて、リカアドオは、

「かようにして、品質の劣れる、あるいはより不利な位置にある土地が順次耕作されることによつて、地代は既耕地において騰貴し、正しく同じ度合で利潤は下落するであろう。そして、利潤の僅少が蓄積と阻止しない限り、地代の昂騰と利潤の低落に殆んど何等の限界もな^(五)く。」

以上の文言に徴するに、リカアドオは、『一論』において、土地の生産物のうちから資本の利潤を含めた耕作に要する一切の出費を支弁した後、其の土地の所有者に残される部分が地代であると考へ、地代をば利潤からの控除であるとなし、従つて、地代の發生及び増加をば、品質の劣る、もしくは位置の悪い土地に耕作が拡張

されることにもとめていることが分る。ゆえに、リカアドオにとっては、

「そこで、地代は、総ての場合において、さきに土地から得た利潤の一部分 (a portion of the profits) である。それは決して所得の新たな創造ではなくて、既に創られた所得の一部分であることが常である^(六)。」

尤も、この同じ箇所についての脚註において、

「地代を以て私は常に土地の本源的且つ内在的な力 (the original and inherent power of the land) の使用に対して地主に与えられる報酬を意味する。地主が自己の土地に資本を投ずるか、それとも前の借地人の資本が借地契約の満了の際土地にとり残されるならば、地主はなる程より大なる地代なるものを取得し得るけれども、この一部分は明らかに資本の使用に対して支払われるのである。それ以外の部分のみが、土地の本源的な力の使用に対して支払われるのである。」^(七)

と述べていることは、前の立言と対比すると、地代概念の不明確さを現しているものと、観なければならぬ。なんとすれば、前のところでは、地代は利潤の一部分であり、利潤からの控除であった筈である。だが、脚註の方では、地代は利潤とは区別されなければならぬものであり、利潤とは異なる所得だからである。

この問題は姑く措くとして、リカアドオの見解では、農業上に何等の改良も起らず、資本と人口とが一定の比例を以て進み、従つて労働の実質賃銀は不変であると仮定すると、社会の発展による資本と人口の増加にともなつて、より遠隔な土地、より劣等な土地への開墾が不可避となつて、この食物の獲得の困難が、地代を発生し、騰貴せしめることになる。なんとすれば、彼に依ると、社会の発展の全過程を通じて、利潤は食物の獲得の難易によつて規制されるものなるがゆえ、これにつれて資本の利潤が低落することとならざるを得ないからである。

もちろん、土地の生産物が地代を生むためには、その生産物の価値が生産費を超える余剰をもたなければならぬ。だが、この余剰が直ちに地代となるのではない。地代が発生し、騰貴するためには、リカアドオは、相対的に利潤が下落することが必要であると観る。この点において、彼はマルサスと所見を異にする。マルサスは、前述の余剰が地代であると考える。だから、マルサスでは、賃銀の下落、あるいは農業上の改良の結果として生ずる生産物の余剰の増大は、地代の騰貴となる。これに対して、リカアドオは、それは、それだけでは単に利潤を増加するに過ぎない。生産物の余剰が、地代乃至は地代の騰貴となるためには、利潤の低下がなければならぬ。

すなわち、リカアドオの理論では、利潤が低落する場合に、はじめて生産物の余剰から地代が発生し、地代が既に徴収されている時は、地代の追加を見ることになる。而も、地代は利潤からの控除であつて、一般に利潤が下落するにつれて地代が騰貴する関係にあるのであるから、地主と農業資本家とはその利害が当に対立することになる。

いな、そのみではない。リカアドオは、地主の利害は社会の総ての他の階級の利害とつねに相反するものと観る。地主の地位は、「食物が稀少且つ高価な場合ほど繁栄なことはないが、これに反して、総ての他の人々は、食物を低廉に獲得することに大なる利益を有している」⁽¹⁾のである。

それでは、地主以外の社会の諸階級間の利害が、なにゆえに一致するのか。資本家以外の人達も、地主に対して、なぜ対立関係に立たされるのか。これ等の問題については、『一論』は、必ずしも説いて充分なものではない。その基本的な考え方が随所に散見されるにせよ、その理論が系統的、組織的に展開されているのではない。

首尾一貫した整然たる結構の下に、該問題について、理論的、組織的な解答を下しているのが、後の彼の名著『経済学及び租税の諸原理』である。

(一) スラッファ編纂のリカアドオ全集、第四巻の評註によると、該書はマルサスのパンフレットが一八一五年二月に刊行されてから数日の間に書きあげられたものであって、彼が既に展開していたところの利潤論をマルサスの地代理論と結びつけることによつて、マルサスが『意見の諸根拠』において唱えている穀物保護貿易論に対する駁論を開陳したものである。

一八一五年二月、穀物法の問題に關して、次の小冊子が相次いで発行された。

Malthus, Inquiry into Rent, 3 February 1815.

Malthus, Grounds of an Opinion, 10 February 1815.

West, Essay on the Application of Capital to Land, 13 February 1815.

Torrrens, Essay on the External Corn Trade, 24 February 1815.

Ricardo, Essay on Profits, 24 February 1815.

リカアドオの『一論』にさがけて刊行された小冊子のうちで、ウエストのものがリカアドオの論文と最も著しい類似性をもっている。事実リカアドオの利潤論はウエストのそれと同じである。ウエストはその理論は教年前に思い付いたものだと云っており、そして彼の小冊子は疑もなくリカアドオの『一論』の前に出版されたものであった。それにも拘らず、リカアドオはそれと別個にその理論を組立てたものであることは、彼が一八一三年及び一四年にマルサスとトラウア(Hutches Trower)に宛てた手紙で明らかであつて、その手紙に彼の理論の本質的な要素が既に認められている。リカアドオは彼の著作が独自なものであることを主張したわけではないが、彼が自分で、「これは余の資本の利潤に關する一論の前に出版されたものであるが、余の手に入つたのは一論が刊行されてから後のことであつた。D・リカアドオ」と記入したウエストのパンフレットがギヤトホムの図書館に所蔵されている。

The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by Piers Staffa, with the Collaboration of M. H. Dobb, Vol. IV, pp.4—6.

(ii) T. R. Malthus, An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, 1815, pp.1—2.

(iii) D. Ricardo, An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, The Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. IV, P. 10.

(四) Ibid, P. 13.

(五) Ibid, p. 14.

(六) Ibid, p. 18.

(七) Ibid, p. 18. n.

(八) Ibid, p. 21.

III

マルサスの地代理論もリカアドオのそれも、ともに差額地代説の範疇に属する理論である。だが、地代の本質と起源とについて、あるいは地代の騰落を左右する法則に関して、両者の観るところは、著しく異なっている。

また、彼等は、地代を収得する地主と社会の爾余の階級との利害関係についても、全く相反する結論に到達して
5 №。

順序として、簡単にマルサスの主張を窺ってみよう。

マルサスに拠ると、地代は土地の全生産物の価値のうちから、農業資本の利潤を含めて耕作に要する一切の出

リカアドオにおける地代理論の発展 (井上)

費を支払った後に、地主に残される部分であるから、地代は利潤と相並んで土地の余剰生産物を構成するものであつて、従つてそれは新しい富であり、富の創造なのである。そして、また、地代は以上の如きものであるから、「地代の直接の原因は、明らかに、粗生産物が市場において売却される価格が生産費を超過することである。」⁽¹⁾ それでは、土地の生産物の価格がなぜ生産費を超過するのか。その高価格の原因として、マルサスは、次の三つのものを挙げる。

第一 土地には、その土地を耕す者を養う以上の生活必需品を産出する性質があること。

第二 生活必需品には、それ自体に対する需要を創造することができ、若しくは生産された必需品の数量に比例して需要者の数を増加することができるという特有な性質があること。

第三 最も肥沃な土地の比較的稀少であるということ。⁽²⁾

すなわち、マルサスは、土地の生産物の高価格の原因を、従つてまた、地代の起源を、土壤及びその生産物に特有な性質にもとめてゐる。

ところで、地代は右の諸原因の作用によつて、発生するものであるとして、この地代の騰貴もしくは下落を支配するところのものは、一体何であるか。マルサスによると、地代は土地の生産物の価格と生産手段の費用との間の差額であるから、この差額を増加せしめるものが、すなわち地代を増進せしめることになる。彼によると、その主なものに、次の四つがある。(一)利潤を低下せしめるような資本の蓄積、(二)労働の賃銀を下落せしめるような人口の増加、(三)一定の効果を挙げるのに必要な労働者数を減少させるような農業の改良、若しくは勤労の増加、(四)名目上生産費を低下させることのないような、需要増加にもとづく農産物の価格騰貴である。⁽³⁾ この地代の上騰

を促す以上の四つの原因は、マルサスの言では、『繁栄と富の増進の最も確実な指標』(The most certain indications of increasing prosperity and wealth)であつて、之に反して、地代の低落は、劣等の土地の耕作の廃止、品質の優れた土地が続けさまに衰頹することと必然的に関連するものであつて、それは、『貧困と衰微の確実な指標』(the certain indications of poverty and decline)である諸原因、すなわち、資本の減少、人口の減退、耕作方法の劣悪化、粗生産物の価格の下落の自然的にして且つ必然的な結果なのである。

もちろん、地代は生産物の価格と生産手段の費用との間の差額より成るといふ場合の生産物の価格とは、現実とその社会において生産されているその生産物の全量を獲得するに必要な価格である。ゆえに、既に富み且つ榮え、人口が増加しつつある国において、穀物がより高価で而も継続的に上騰しつつある理由は、常に劣等地に、より大なる経費を要する土地に頼ることの必然的な結果であつて、地代が決してその原因をなすものではない。蓋し、生産物の最後の部分は、その生産費において販売されたものであつて、従つて、地代が存しないにも抱らず、より低廉には産出され得ないからである。

かようにして、マルサスは、穀物の価格は地代によつて決定されるのではなく、反対に地代が穀物の価格によつて決定されるものであるから、穀物の高価格は地代を増大せしめることになるが、この地代なるものは、決して個々の地主や地主階級にとつてのみ有利なものではないと観る。彼によると、それはまた、製造業に対して堅実な国内需要を喚起し、租税の最も有力な源泉を提供することになる。労働者階級にとつても亦然りで、穀物の高価格は彼等にとつて有害であると考えるのは、『極めて近視的な見解』(a very shortsighted view)と云わなければならぬ。「彼等の福祉にとつて必要欠くべからざるものは、彼等自身の慎み深い習慣と労働に対する需

要の増加である。従つて、私は、同様の習慣と同様の需要との下において、穀物の高価格は、その自然的な結果を生ずる時間の余裕があつたとすれば、彼等にとって不利益となるどころか、確實にして疑のない利益であることを、はつきりと断言するに躊躇しない。労働に対する同一の需要を充たすためには、生産の必要価格が払われねばならず、従つて労働者は、その価格が高かろうと安かろうと、生活の必需品の同じ数量を支配し得るに相違ない。併し、もし彼等が、生活の必需品の同じ数量を支配し、必需品の騰貴せる価格に比例して労働に対する貨幣価格を受取ることができらば、穀物に比例して騰貴しないところの総ての便宜品や娯楽品（貧乏人によつて消費されるものも多々ある）に関しては、彼等の境遇は殆んど決定的に改善されるであらうことは、疑を容れない。^(四)すなわち、穀物で評価された貨銀の全部が生活必需品に費されるのではなく、その一部が便宜品や娯楽品の購入に充たされるものであるから、その支配する便宜品や娯楽品の多寡が労働者の境遇に大きな相違を生ずることになる。而して、マルサスは、殆んど常に、穀物の価格が高ければ高いほど、その余剰は労働者をして益々多くの享樂物資を入手せしめる、と観る。だから、マルサスにおいては、地代の上昇は国民の経済を發展させるものであり、地主は国家の繁栄に最も深い関係をもつ階級なのである。

如上の見地から、マルサスは穀物法の改正に賛意を表し、穀物の輸入の自由に反対した。彼に拠ると、穀物の輸入を自由になると、穀価は下落し、これがため生産額の減少となつて地代の低落となると共に、農業資本は破壊されることになる。そのみではない。穀価の下落は、労働賃銀の下落の主たる原因をなすものであつて、総ての財貨の価格もこれに伴つて低落しなければならぬことになつて、産業資本の利潤が低下し、資本の蓄積が阻害されることになる。而も、自由貿易の採用によつて失業の危険が起り得べきがゆえに、労働者階級にとつては

かたがたもつて一段と不利益とならざるを得ない。この制度によつて恩恵を受ける者は、一般には、公債所有者や一定の俸給で生活する人達だけで、強いてこれに附加え得る者としては外国貿易に直接に従事する少数者だけである。だから、穀物の自由な輸入は、イギリスの全産業の発展を妨げることになる。而も況んや、食物の大なる部分を外国の供給に依存することの甚だ危険たるにおいてをや。之に反して、穀価の騰貴は、独り農業の進歩を意味するばかりでなく、凡ゆる産業の発展を促し、国富の増進を見ることになる。だから、これは、国家の進歩、発展の徴候として歓迎すべき現象でなければならぬ。

以上が、穀物の輸入の制限を是とし、穀物法の改正を擁護したマルサスの主張の大要である。

この穀物貿易の問題がリカアドオ経済学の出発点となつたものであつて、マルサスとの間に交わされた論争が契機となつて、経済理論の研鑽に専念、その努力が遂に彼の名著『経済学及び租税の諸原理』を大成させたのであるから、該書は同時にまた、如上のマルサスの見解に対する、反撃でもあり、回答でもある。

それでは、先ず、リカアドオは、彼の名著において、地代の本質を如何に観ているか。彼は、最初、『低廉な穀物の資本の利潤に及ぼす影響に関する一論』では、地代を土地の本源の且つ内在的な力の使用に対して地主に与えられる報酬という考えをもちつつもこれに徹底することができなくて、地代は土地の余剰生産物であるとなし、これをもつて漫然と利潤からの削除、利潤の蚕食の外ならぬものとなしている。『経済学及び租税の諸原理』においては、地代の本質に関する考察を更に深化し、徹底化して、地代を土壤の本源の且つ不可滅的な力 (the original and indestructible powers) の使用に対して地主に支払われるところの部分と定義し、^(五) 利潤とはつきり區別し、地代は利潤からの控除ではないとなしている。

それでは、土地の使用に対して、なぜ地代が支払われるのか。それは、土地が量において無限でなく、質において均一でなく、位置において便・不便を有するからである。而して、「地代は常に二つの等量の資本と労働とを投下することによって獲られる収穫の差額」であるから、豊饒にして便利な位置を占めている土地が、増加する人口にたいする穀物生産のため必要とされる程度以上に遙に豊富に存在するか、あるいは資本と労働が旧土地にたいして些の減収をも見ることなしに無制限に投下することが可能とされるならば、地代及び地代の騰貴なるもの存在する道理はない。ところが、実際において、土地は、有限にして、品質に差等あり、位置の如何によつて大いに利便を異にしている。だから、社会の發展上、最も肥沃にして且つ最も有利な位置を占める土地が先ず最初に耕作される。穀物の不足が、第二の豊度、利便を有する土地に耕作を拡張させるに及んで、両地の収穫物の差額が、もしくはは収穫物の価値の差額が第一の土地の地代となる。第三の土地が耕作されると、第二の土地にも地代が発生し、両者の収穫物の差額が、もしくはは収穫物の価値の差額がその地代となる。而して、この場合には、第一の土地の地代はそれだけ騰貴することになる。既耕の土地に、第二、第三の資本と労働を投下する場合にも、土地には収穫通減の法則が作用するから、全く同じ現象が現れる。

かようにして、リカアドオは、地代の起源は土地の限定性にあるとなす。すなわち、土地に限りがあり、豊饒にして、場所の便のよい土地が比較的稀少なことにあるとなす。抑も、一切の財貨の交換価値は謂ゆる限界生産物の生産に必要な労働量、すなわち、最も不利な事情の下に生産を継続する者によつて必ずや生産に投じられなければならないより大なる労働量によつて決定されるものであり、最も不利な事情とは、所要量の生産物を獲得するためには、そこまで生産を進めなければならぬところの、その最も不利な事情を云うのである。「されば、粗生

産物の比較的価値が騰貴する理由は、その取得せられる最終部分の生産に一層多量の労働が使用されるからであつて、地代が地主に支払われるからではない。^(六)何となれば、限界土地には地代が存しないからである。従つてまた、「穀物は地代が支払われるから高価なのでなくて、穀物が高価だから地代が支払われるのである。」^(七)

富と人口との増加につれ、品質の劣つた土地、場所の便の悪い土地に耕作が拡張されると、穀物の生産により多くの労働を要することとなつて、穀物の交換価値は必然的に騰貴することとなる。穀物の交換価値の上騰は、すなわち既耕地における地代の発生であり、地代の昂騰である。この穀物の交換価値の昂騰によつて、「この穀物は畜により多くの貨幣と交換されるばかりではなく、他の凡ゆる財貨のより多くの数量と交換されるであろうから、その所有者はより大なる価値額を有することとならう。而も、他の何人もその結果として失うところがないであろうから、社会全体はより大なる価値を有することとなるであろうし、従つてその意味において地代は価値の創造である。」^(八)すなわち、穀物の交換価値が、穀物の任意の一部分を生産する困難のため、騰貴するときは、社会全体としてより大なる価値を有することになるが、そのことは社会の富に何等附加するものではないから、その限りにおいて、地代は決して富の創造ではない、とリカアドオはいう。リカアドオの観るところでは、地代は、要するに、穀物の価値の一部分を、その元の所有者から地主へ移転するに過ぎないものであるから、地代は「価値の創造 (a creation of value) であり、価値の移転 (a transfer of value) であるが、富の創造 (a creation of wealth) ではない」ということになる。^(九)以前には、リカアドオは、地代を、既に創られた所得の一部分、あるいは既に創られた富の一部分^(九)という言葉で表現したが、彼は後、価値論を確立し、価値乃至価格の理論から専ら地代の起源を考察するようになって、その主著においては、地代は価値の創造であるという命題の定立となつた

のである。そしてまた、地代を漠然と利潤からの控除とみる従前の考え方を拭い去つて、地代と利潤とを區別することによつて、「地代の増進を規定する法則は、利潤の増加を支配する法則とは大いに異なり、同じ方向に作用することは殆んどないことが分る⁽¹⁰⁾」という見地に到達し得たのである。

リカアドオは、如上の理論を提げて、マルサスの地代の起源論を批判し、その矛盾を衝くと共に、更に進んで、地代の昂騰は国運發展の象徴であつて、地代騰貴の原因である穀物の高価格は凡ゆる産業の發展を促し、資本家及び労働者の利益を高め、国富を増進することになるから、地主階級ほど国家の繁栄とその利害關係の緊密な社会階級は他にあり得ないとなすところのマルサスの見解を反駁せんとする。

これを論駁するために、リカアドオは、労働価値説を確立し、これによつて、先ず第一に、穀価又は労働の賃銀と一般財貨の価格との無關係を立証し、第二に、賃銀と利潤との逆比例關係を明らかにすることによつて、穀価の下落は利潤の低落をもたらずものではなく、事實はその逆で利潤の増大となることを証明している。而も、この場合、賃銀は低落することになるも、それは名目賃銀に過ぎず、實質賃銀の方は上昇となることを論証することによつて、その主張を更に積極的たらしめる。

リカアドオは、地代理論と人口原理とを縦横に駆使することによつて、『社会の自然的發達』(natural advance of society)の法則なるものを導き出している。その要点をかうつまんで述べると、⁽¹¹⁾社会發達の初期の段階においては、地主と労働者の土地の生産物の取得分は、生産物の価値に対して僅少であつて、その価値の大部分は農業資本家に帰するが、富や人口が増加し、穀物の獲得が困難となるにつれ、地主及び労働者に帰属する取得分の生産物の価値に対する割合は、漸次増加することになる。尤も、労働者の取得分は、穀物が高価となるため、価

値の割合においては増加するが、その分前実質は、すなわち、彼の獲得する生産物の数量は、減少することになる。これに対し、地主の取得分は、価値においても、また数量においても、俱に増加することになる。地主と当に正反対の立場に在るものは、農業を経営するところの農業資本家である。社会の発展につれ、彼の取得分は、価値の点においても、将又数量の点においても、減少に減少を重ねてゆく。リカードにおいては、商工業資本の利潤は農業資本の利潤によつて規定されるものなるがゆえに、商工業資本家の取得分も、これと同様な動きを示すことになる。そのあげくは、資本の蓄積は終熄を告げ、追加労働は全く需要されることなく、労働の実質賃銀は労働者が生存を維持するぎりぎりの最低限まで押し下げられ、人口は飽和点に達し、社会は停頓静止の状態に陥らざるを得なくなる。

かようにして、リカードは、マルサスと反対の結論に到達する。彼にあつては、マルサスとは逆に、地主階級は社会に対して何等寄与することなく他の総ての人達を犠牲に供することによつて富み且つ栄える者である。だから、彼においては、社会の総ての他の階級の利益を増進するためには、須く地主の利益を削減すべきであつて、穀物の輸入に対する梗塞を撤去する場合、被害を受ける者は、地主であり、また地主のみという主張となるわけである。

(一) T. R. Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent*, 1815, p. 2

(二) *Ibid.*, p. 8.

(三) *Ibid.*, p. 22.

(四) *Ibid.*, pp. 47—49.

リカードにおける地代理論の発展 (井上)

- (五) D. Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, Gonner's ed., p. 44.
- (六) *Ibid.*, p. 51.
- (七) *Ibid.*, pp. 51—52.
- (八) *Ibid.*, p. 394.
- (九) 一八一五年二月六日附のリカアドオのウマルサスへ宛てた書簡の中で、彼は、「私はまた、地代は決して富の創造でないと思います。それはつねに、既に創られた富の一部分 (a part of the wealth already created) であって、必ずや資本の利潤を犠牲にして享受されるが、だからといって公共の利益にとつて有益でないというのではありませぬ。」*The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. VI, p. 173.

(一〇) D. Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, p. 45.

(一一) 拙著、リカアドオ貿易論の研究、第七章、リカアドオと経済政策、参照。

四

リカアドオの地代理論は、以上に述べたように、マルサスとの論争を通じて、発展した理論である。

さはいえ、両者の見解には、彼等が考えるほどの大きな懸隔があるかどうかは、検討を要する問題であろう。

マルサスは、地代は利潤と相並んで土地の余剰生産物を構成し、粗生産物が市場において売却される価格が生産費を超過することから生ずるがゆえに、新しい富であり、富の創造であるとなすが、これに對して、リカアドオは、地代は富の創造ではなく、価値の創造であるという。

だが、仔細に点検すると、マルサスもリカアドオと同様に差額地代説の基礎の上に立ち、当該社会において必

要とされる土地の生産物は、結局において、その生産費において販売されるものであって、従つてその部分については地代があり得ないことを承認するものであるから、地代の本質に關する両者の見解には、實質的には、それほど大きな相違はなく、その多くは概念規定の問題に帰着するものでなからうか。

マルサスが地代の起源として挙げた三つの原因に対しても、リカアドオはそれぞれ批判を加え、その矛盾撞著を指摘し、地代の生成は豊饒な土地の比較的稀少という原因のみで充分であると考える。この批判については、マルサスは、自分は地代の生成には三つの原因が必要であると述べたのであつて、地代は常にまた正確にそれ等の一つに比例して変動すると云う積りはなかつたと釈明している。もちろん、マルサスの起源論そのものは決して一義的に明瞭なものではない。従つて、色々と問題があるにしても、リカアドオの説くところと必ずしも完全に対立するとは考えられない。たとえば、マルサスは地代生成の第一原因に土地の豊度を掲げ、地代は土地の豊度に比例すると述べ、これに対してリカアドオは、地代は土地の絶対的豊度のみからしては生じ得ないものとして、この説を斥けている。なるほど、リカアドオのいうように、豊度は地代を支払う能力たるに過ぎないものであつて、かような能力を有することと實際にこれを支弁することは別問題ではあるが、もともと地代を支払う能力のない土地から地代の發生するわけもなく、従つて、リカアドオの『比較的稀少説』とマルサスの『第一原因説』とは互に補うものだと見ることもできるのであつて、マルサスの右の弁明をこのような趣旨に理解するならば、両者の意見の相違はよほど狭められることになりはしないであらうか。

だが、小論の目的は、リカアドオの地代理論の發展の過程を辿ることにあるから、これ等の吟味は他日に譲りたいと思う。